

一般社団法人 アクト・ビヨンド・トラスト 2022 年度助成企画募集のご案内 「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」

お米から果物など幅広い農産物に用いられ、シロアリ駆除剤や家庭用殺虫剤として身近な暮らしにも入り込んでいる浸透性殺虫剤（ネオニコチノイドおよびフィプロニル）——。近年の急速な研究の進展により、環境中での持続的な慢性曝露による無脊椎動物への時間累積的毒性や、食物連鎖を通じた漁業への脅威などが明らかになりつつあります。世界の科学者コミュニティからは、生態系と生物多様性全体を脅かすことへの警鐘が鳴らされるだけでなく、ヒトの母体から胎児への移行や発達神経毒性を懸念する声も挙がっています。

本助成は、予防原則を踏まえて、製薬メーカーの意向や現行の行政判断に左右されない独立の立場からネオニコチノイド系化合物の影響を検証する「調査・研究」活動、浸透性殺虫剤の問題点や最新の研究成果を広く共有する「広報・社会訴求」活動、浸透性殺虫剤を使わないサプライチェーンの確立を目指す「市場“緑化”」活動、国や地方の立法・行政機関に規制強化を働きかける「政策提言」活動を支援します。2021 年から始まった国の農薬再評価が進むいま、規制強化へ日本が踏み出すことを後押しできるような成果を期待しています。ふるってご応募ください！（応募要項など申請書類一式は下記リンクよりどうぞ）

<https://www.actbeyondtrust.org/program/kobo2022/>

1. 応募資格：ネオニコチノイド系農薬（およびフィプロニル）に関する問題提起や、使用の削減ないし中止に取り組む個人および団体（ボランティアグループ、NPO/NGO、公益法人、研究機関、生産者など。地域、法人格、活動実績は不問）
2. 助成分野と金額：「調査・研究」「広報・社会訴求」「市場“緑化”」「政策提言」分野（いずれかを選択）
1 企画あたりの助成額：上限 100 万円
※2 部門以上にまたがる案件は、1 部門を超えるごとに 1 部門あたり 50 万円を加算
3. 助成対象期間：2022 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日の間に実施される活動
4. 応募受付期間：2021 年 12 月 7 日～2022 年 1 月 31 日
5. 問い合わせ先：一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト 助成係
電話：070-6551-9266（10：00～19：00）
Email：grant@actbeyondtrust.org
<http://www.actbeyondtrust.org>
<https://www.facebook.com/actbeyondtrust>
【12/28～1/3 は年末年始休業】

一般社団法人アクト・ビヨンド・トラストは、自然環境と人間生活の調和を目的とした市民や NPO・NGO の活動を支援する、独立した民間基金です。問題解決のための具体的・効果的・創造的なアクションを重視し、資金援助、コンサルティング、技術および人材提供、トレーニングなどを行なっています。詳しくは上記 web サイトや Facebook ページをご覧ください。

これまでの企画から

2021 年度に採択された企画例をご紹介します(ただし当該年度は「調査・研究部門」と「広報・社会訴求」部門のみ公募)。

これまでに実施された企画は、アクト・ビヨンド・トラスト web サイトの「助成プログラム」(公募助成)をご参照ください。2020 年度までの各助成対象企画について報告書をご覧いただけるほか、同サイトの「助成先活動情報」では、2021 年度助成対象企画の活動状況をリアルタイムで取り上げています。

<http://www.actbeyondtrust.org>



■ ため池や自然止水域におけるネオニコチノイド系農薬の汚染状況と絶滅危惧水生昆虫の生息状況の相関調査 Ⅲ(調査・研究)

本研究は、ため池などの止水域でのネオニコチノイド系農薬の汚染実態を、二年間の助成調査により調査してきたもので、1)北海道から沖縄まで国内各地で検出され、2)絶滅危惧種の絶滅産地ではとくに高濃度の検出が見られ、現存産地でも多くの地点で検出があり、3)その汚染は地下水系に及んでいる、など深刻な実態を明らかにしつつある。最終年度では、未調査地域の調査、高濃度汚染地と隣接地の比較、農薬の季節動態など、新たな切り口によりさらに研究を深化させる。

■ ネオニコチノイド系農薬の使用が魚類の生理機能に及ぼす影響把握(調査・研究)

- 魚類は脊椎動物に属し、その機能への正負影響はほぼ哺乳類のそれと等しい。
- 魚類をモニタリング生物として用いることで、ネオニコチノイド系農薬の浸漬と経口曝露の両方の影響を同生物種で比較可能である。
- ネオニコチノイド系と同左以外の農薬の浸漬と経口曝露が魚類の各種機能に及ぼす影響を把握する。
- 室内実験で判明した生理機能への影響が水田や同周辺水域で生じているか否かを、水中農薬濃度とともに調べ、ネオニコチノイド系農薬の生態影響を明確化する。

■ 継世代影響から捉えるネオニコチノイド系農薬のシグナル毒性と神経前駆細胞・グリアの局所活動(調査・研究)

環境化学物質の継世代影響が懸念されている。「そのメカニズムを科学的に明らかにする」ことは喫緊の課題である。中でも、発達神経毒性は極めて重要な問題である。これまで申請者はネオニコチノイド系農薬(NN)の神経毒性作用を生きた動物(生体)で実証し、かつ、2020 年度の本助成金で継世代影響の一端を明らかにした。本研究では、脳機能攪乱の生体直接観察および多次元メタボローム解析により NN の継世代影響を掘り下げ、その実態解明と脳機能攪乱を早期に検出できる新規バイオマーカーの同定を試みる。

■ #最近の農薬知ろうよ 連続講座!(広報・社会訴求)

ネオニコチノイドやグリホサートなど、長期の微量摂取問題が指摘されている農薬がホームセンター等で何の規制もなく売られ、子ども達の口にも入っている。消費者は農薬を選ぶ知識がなく、ネオニコチノイドやグリホサートが残留した農産物は問題だと思ふ消費者ですら、それと知らず購入し、家庭や家庭菜園で使っている、もしくは学校や公園など身近なところで使われている現状がある。ネオニコチノイドやグリホサートを使った農産物を見分けられる消費者になるためにも、農薬が農業の現場でどのように使われているかを知り、ホームセンター等で売られているネオニコチノイドやグリホサートとリンクして理解できるよう、ワークショップを含めた連続講座を開催する。